
書評

坂田謙司 著

『「音」と「声」の社会史

——見えない音と社会のつながりを観る』

(法律文化社, 2024年, A5判, 312頁, 2,800円+税)

立命館大学 小川明子

Ritsumeikan University Akiko OGAWA

本書によれば、音が記録可能になったのは19世紀後半のことであり、それ以前の社会においてどのような音が存在し、人々がどのように話をしていたのかを知る手がかりはきわめて限られている。ゆえに、他の領域の歴史的研究と比べても、音声に関する研究は多いとは言えず、ラジオなど音声メディアについての包括的な研究も、国内外問わず十分とは言えない状況である。本書は、そうした研究の空白を埋めるべく、多様な視点から音声の歴史を紐解く、網羅的な一冊であり、貴重な存在と言える。

本書の特徴としてまず挙げられるのは、音声の歴史を、地球誕生からV-Tuberまで、壮大なスケールで描いている点であろう。音の発生という物理的、根源的な問いから始まり、人類による言語の誕生、口承による語りの文化、そして歌や楽器の歴史、街頭宣伝などの生活音の役割、録音・伝達技術の発展、戦争とプロパガンダに至るまで、記録が定かでないものについても関連資料から推測しながら、非常に広範なトピックが取り上げられ

ている。ASMRなど、ネット上で話題の音や、ボーカロイドなどデジタル時代の音声についても論じられ、音声の歴史を概観できる一冊である。

もう一つの特徴として、音声が社会や文化にどのように影響を受け、また影響を与えてきたのか、社会史の視点を中心に、きわめて学際的に論じられている点が挙げられる。音声メディアは、技術の発展の歴史として語られることが少なくないが、本書では、音や声が、人々の生活や社会の構造にどのように組み込まれてきたのかを多角的に分析している点で興味深い。祈りの合図であったカリオンがヨーロッパで時間を示すメディアとして人々の労働を枠付け、一方で音楽を自動で奏でる技術へと進化していく過程。また、文字を持たず、娯楽の少ない農村を巡り歩き、地域を越えて情報や物語を届けていた視覚障害を持つ語り部「瞽女（ごぜ）」を一種のメディアとして捉え、彼女たちの社会的役割を描き出す。あるいは、歌声合成ソフトを用いたボーカロイド文化や、アバターを使って配信を行うV-tuberについても、日

本の伝統芸能である文楽を介して説明を試みる。本書の魅力は、「音」や「声」をめぐるさまざまな歴史的事実や異なる分野の知見を縦横無尽に結びつけながら、音と声の歴史を大胆に紡いでいくその手法にある。

こうして、音声のコミュニケーションの多面性が、その壮大なスケールと多様な視点によって浮かび上がる一方で、扱う範囲が広く、また時間軸が長いために、音声コミュニケーションの本質への焦点がやや分散しているようにも感じられる。とはいえ、音の発生からデジタル時代の音声技術に至るまで、時間軸を横断し、時に文明論、科学史、時にメディア論や社会学の視点を交えながら語られる本書は、従来の歴史研究、メディア・コミュニケーション研究の空白を埋める基礎文献であるとともに、学際的な教養があつてこそ成立する野心的な研究である。卒業論文などで音声のメディアをテーマにしたい学生は少なからずいるが、そうした研究の手引きとして必読書だと言える。音声のコミュニケーション研究を始めるにあたってこの一冊を読めば、音声コミュニケーション史の研究領域やテーマ、動向を概ね理解することができるだろう。

本書においてとりわけ興味深いのは、第5・6章における声とジェンダーの分析、そして第10章で論じられる声とプロパガンダの関係ではないか。日常生活に溶け込む音声メディアや、歴史的な出来事における声の力を掘り下げたこれらの章は、本書のハイライトと言えるだろう。第5章では、駅構内や車内アナウンス、エスカレーターの注意喚起、さらにはスマートフォンのAI音声に至るまで、私たちの生活空間を覆う自動音声に焦点が当てられる。著者は、これらの自動音声（著者は「お世話声」と呼ぶ）が圧倒的に女性の声が多いことに着目し、その理由を探る。自動音声を単なる技術の問題としてではなく、近代化や女性の社会進出のプロセスと重ねて論じられる点で示

唆に富む。続く第6章では「声のルッキズム」という視座から、声が個人のアイデンティティや自己肯定感に与える影響や、声をめぐる社会的な期待についての分析が試みられる。外見だけでなく、声にもまた、理想的なイメージや社会的規範が投影されることを明らかにする本章は、メディアや日常生活における声について考え直す契機となるだろう。

さらに第10章「声のダークサイド」では、声を持つ負の側面、すなわちプロパガンダやヘイトスピーチとの関係が掘り下げられる。第二次世界大戦や、ルワンダの大虐殺といった歴史的事例からは、声や声のメディアが単に人の温もりを伝える手段としてだけでなく、時に社会を分断し、暴力を助長する力を持つことに否応なく気づかされる。こうした声の危うさは、デジタル社会の「声」の役割を問いなおす視点を提供している。

ここ数年、これまで不足していた、ラジオや音声メディアを介したコミュニケーションをめぐる書籍が次々出版されており、音声を通じて社会や文化を読み解く手がかりが徐々に揃いつつある。なかでも本書は、単なる技術史や事例研究ではなく、学際的視点から多角的に音と声のコミュニケーションについて論じた基礎文献として有益であり、音声メディア研究における必読の一冊となるだろう。今後、これらの研究成果をもとに、新たな研究が育っていくことが期待される。

最後に本書の楽しみ方をもう一つ紹介したい。普通であれば見落としてしまいそうな内容が丁寧に拾われている点も本書の魅力のひとつだ。著者が常日頃から、広い視野を保ちつつ、細部に注目し、そこに潜む意味を丁寧に掘り下げて楽しんでいる姿勢が感じられる。世界で最も古いとされる楽器、レコードに録音した声を送る郵便、受話器をどちらの手で持つのかなど、各所に散りばめられた「トリビア」的な面白さも、読者には一緒に楽しんでいただきたい。